

雄城台野球部創設時のおもいで

◆入学当時

昭和四十八年（1973年）当時大分県内進学校の受験制度は大分上野丘高校・大分舞鶴高校そして我が大分雄城台高校の三校による合同選抜方式であった。入試の結果、私は新設の雄城台高校に入学した。当時はまだ校舎がポツンと一つあるだけでグラウンドすら無かった。一年生の時は部活にも入らず平凡に過ごした。この頃すでに大津留（現OB会長）は硬式野球部の創設を何度も校長に談判していたらしかった。



建築中の普通教室棟とグラウンド（S. 48. 1）

◆軟式野球同好会創設

翌昭和四十九年、二年生になると大津留と同じクラスになった。大津留はこの頃から野球部創設のための署名活動を始めた。署名は三十名程度集まったが、彼の熱意が伝わったのか、ついに藤原正教初代校長が同好会（軟式）設置を認めてくれた。監督は数字の清永博道先生にお願いした。しかし、グラウンドがなかったため、為朝神社（雄城神社）南側の空き地で練習を開始した。もちろんバックネットもなかったため、大津留がどこからか漁網を調達してこれをバックネット替わりに設置した。グラウンドはデコボコで当初三十名近くいた部員も十数名程度まで減っていた。

夏休みに入るとついに空き地の一角に内野くらいの土地を整地し、練習にも熱が入ってきた。植田中学との練習試合、桃園球場での練習試合、冬休みの大銀グラウンドでの練習も

思い出す。また、たまたま大分商業の名監督松田先生（当時）の奥さんが雄城台高校に勤務していた関係で、大商の練習（無論、硬式）にも参加させてもらった。松田監督には色紙もいただいた。そしてユニフォームも作った。

当時は監督室やブルペンは無論、部室もなく、為朝神社を部室変わりに使わせてもらっていた。大津留は大商の野球が大好きで、「大商野球部三訓」をまねて今はなくなってしまうようだが「雄城台野球精神」として練習後、部室（神社）で「気力に欠けることなかりしか。闘魂に欠けることなかりしか。和合に欠けることなかりしか」と唱和していた。また、先生方の車が傍を通ると必ず帽子をとって挨拶した。印象を良くするためだ。



◆公式戦出場

とうとう三年生になった。一年生が数名入部してきた。未だ同好会のままだだったが、なぜか六月の高校県体に出場できることとなった。また、このころ事務室におられた近藤一誠さんが練習をみてくれるようになっていた。近藤さん（私達は近藤先生と呼んでいた）は福岡県の名門小倉高校野球部OBで、練習はそれは厳しいものだった。朝練、昼休みは体育館脇での素振り、そして放課後の練習とたっぶりやった。また、なんと女子マネージャーが三人も入部してきてビックリした。

そして、いよいよ試合の日が来た。試合会場は鶴崎高校のグラウンドで皆バス（もちろん路線バス）に乗っていった。

◆初勝利と三重農業との死闘

一回戦の相手は森高校（今の玖珠三山高校）であった。試合の経過は忘れてしまったが、とにかく勝利した。公式戦初勝利である。

二回戦は優勝候補の三重農業であった。

当時のメンバーは次のとおりである。

- 一番 二塁・幸
- 二番 遊撃・池辺
- 三番 捕手・大津留
- 四番 投手・藤本
- 五番 一塁・大嶋
- 六番 三塁・小関
- 七番 右翼・小野
- 八番 中堅・神屋
- 九番 左翼・三重野

いい試合だった。中盤まで二対一で勝っていたが、後半私が三塁の小関にハーフバウンドの悪送球をしてランナーが帰り、同点となった。それでもエースの藤本はカーブがよく決まり、相手を抑えていた。三重農業はバッティングは大したことなかったが、守備は抜群に良かった。余談であるが、現在の軟式ボールは飛ぶようになったが、当時のボールは全く飛ばなかった。

試合はそのまま延長戦に入り、十回でも決着がつかず抽選（9名によるジャンケン）で決着をつけることとなった。私は嫌な予感がした。

◆私のせいで負け

予感的中した。私は何気なく一番最後にいたのだが、なんと私の前まで四対四のタイとなった。私は自分が急に固くなったことを覚えている。相手はパーを出した。

私はグーを出していた。責任を感じたが仕方ない。帰りのバスの中で皆私にパーを出して笑っていたが、負けた悔しさよりも善戦した満足感で皆笑顔だった。とにかく一つ勝ったし、それでよしとしよう！と。

◆大会後のエピソード

県体終了後、野球部を引退したが特筆すべきことが二つある。

一つは七月の全国大会県予選にも出場できることとなったことだ。残念だが私は県体を最後に受験勉強となったため、大会には出場していないが。

もう一つは高校県体二回戦で敗れた三重農業が、この大会で県代表となり全国大会へ出場

し優勝してしまったことだ。対戦した者からすると、つくづく軟式野球は守備だと思って
しまう。また、全国大会優勝校といい試合をしたうちも結構強かったということか。

◆最後に

当時の雄城台高校に軟式とはいえ同好会ができたのも、公式戦に出場できたのも、大津
留君のたぎる情熱が皆を引っ張っていった結果だと思う。彼には感謝している。

今の選手たちからすると当時の様子は想像すらできないと思うが、当時の私からしても今
の野球部の姿は想像できなかった。ましてや甲子園など。
早く甲子園に連れて行ってもらいたいなあ。

乱文乱筆多謝

令和元年八月

一回生副主将 幸 郁

